

『センス・オブ・ワンダー』

レイチェル・カーソン 著 上遠恵子 訳 新潮社 1996/07



自然の中にわけ
いって行く時の、
すばらしい手引
書がある。それ
は、『センス・オ
ブ・ワンダー』。
著者のレイチェ
ル・カーソンは、
『沈黙の春』で化
学薬品が地球に

及ぼす影響についての警鐘を鳴らした人。そんな人の書いた本は難しいだろう、と思っていた。しかし、それは大きな思い違いだった。『センス・オブ・ワンダー』は、全編が詩のような輝きを持った短い文章で、幼いロジャーとともにメイン州の海岸や森の中で過ごした日々を回想しながら、自然の不思議に感動することの大切さを、我々に教えてくれる。

特に私が勇気付けられるのは、「知ることは感じることの半分も重要ではないと信じています」という一節だ。花の名前を何回聞いても忘れてしまう、虫やクモに至ってはなおさらだ。でも、クモの巣にかかった水玉の美しさや、草むらに見え隠れする野いちごの甘酸っぱさに感

動する心だけは持っている、それでいいのだ、と背中を押してもらったような気がする。

センス・オブ・ワンダー……自然の不思議に目を瞞る心。子どもには生まれつきそなわっているそのような心をいつも新鮮に保つためには、この世界の神秘をともに感じ、共感し、感動を分かちあう人が少なくともひとり、そばにいる必要があるという。そう、感動は、誰かと分かちあうと、共鳴して何倍にもふくらむのだ。気づかないだけで、実は私たちのまわりにも、センス・オブ・ワンダーの持ち主はいる。先日98歳で亡くなったAさんは、最後の日々まで、美しい花を見ては心をふるわせ、大好きだった吾亦紅を見るとにっこりと笑顔をみせてくれた。年老いて病を得ても心の輝きは失わなかったAさんの生きかたは、私たちを励ましてくれる。この話をレイチェルが聞いたら、どんなに喜ぶことだろう。本の最後に、彼女はこう記している。

——地球の美しさについて深く思いをめぐらせる人は、命の終わりの瞬間まで、生き生きとした精神力をたもちつづけることができるでしょう。——